

立川市姉妹市委員会（立川・サンバーナディノ姉妹市委員会）について

1. 姉妹市提携の経緯（東京こぶしロータリー・クラブ誕生まで）

昭和34年(1959年)12月23日、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンバーナディノ市(レイモンド・H・グレゴリー市長)と立川市(櫻井三男市長)との間に姉妹都市締結がなされた。この背景には、昭和29年(1954年)アイゼンハワー大統領は「People to People Program」を提唱、ヨーロッパを初め東南アジア等の都市は第二次世界大戦により疲弊し、人心も荒みんでいた状況の解消策として、姉妹都市提携を奨励する流れがあり、両市には基地があり、面積、産業、交通等類似点が多かったことから、立川航空基地情報部を通して立川市に打診があったのがきっかけであった。姉妹都市提携は東京都で初めて、全国で26番目であった。

この姉妹都市提携を契機に、昭和35年(1960年)1月、文化・経済等の交流を通じ、両市民の親善と理解、世界平和達成への貢献を目的として、立川市姉妹市委員会(San Bernardino Sister City Committee、以下「姉妹市委員会」)が結成された。同年6月に、東京立川ロータリークラブ(初代会長中野喜介商工会議所会頭)が東京八王子ロータリー・クラブ(新倉源蔵特別代表)をスポンサーに、三多摩に2番目のクラブとして設立される。そして翌年、サン市のロータリー・クラブ、カール・ラウツ会長夫妻が立川を訪問、鐘(今も点鐘として使用)が贈られた。

<注釈：この頃の委員会構成はわからない。市役所の一機関であったかも。初代委員長は櫻井三男市長'59-'65であった。因みに歴代委員長は、中村富男委員長'65-'70、鈴木春吉委員長'70-'74、猿渡榮一委員長'74-'77、永井龍行委員長'77-'96、猿渡敬子委員長'96-現在>

この委員会の主要な活動の高校生交換事業は、昭和37年(1962年)6月23日、サン市の高校生3名が立川市に訪れたのが最初である(立川市からも3名)。

しかし昭和39年(1964年)市議会の意見に従い、派遣を中止する。この時、東京立川ロータリークラブ(以下「立川クラブ」)は会員全員で拠金を募り、積極的に里親を引き受けることを申し出て、昭和40年(1965年)再開されることとなった。これ以来立川クラブの会員が中心となり物心両面にわたり、この事業を支えてきた。

<注釈：これ以降、立川クラブ会員だけではなく、国立・昭島のロータリクラブ会員も里親を引き受けた(1984年：里親の会結成)。また、立川クラブだけでなく、東京ライオンズクラブ、青年会議所も来日学生を招待したり、学生との交流事業に積極的に参加した>

2. 東京立川こぶしロータリークラブ設立と特別会員

東京立川こぶしロータリー・クラブ(以下「こぶしクラブ」)は昭和61年(1986年)2月に設立された。現行のクラブ運営規定はその翌年7月から施行されたもので、第4条6項「会員は立川姉妹市委員会の特別会員となり、その会費を年度初めに一般会計より納

める」は、今から数年前に臨時総会でその是非につき議事に付されたことがあったが、今日まで改正されることなく続いている。

設立当初は、既に、立川クラブは里親を受ける会員はほとんどなく、全ての会員が特別会員ではなかった。そのため、市役所からの補助金(当時100万円)があったが、活動資金を如何に集めるか苦勞していた。現在支援5団体があるが、当時会費収入は90%以上が立川クラブ会員からの特別会費であった。こぶしクラブが全員特別会員となって2・3年後に立川クラブも全員が特別会員になった。

私は立川クラブ在籍中の昭和59年(1984年)から姉妹市委員会の理事となっており、初代幹事としてクラブ運営規定に関わっていた。当時の永井委員長の意を察し、立川クラブから移籍後、こぶしクラブの会員は全員が特別会員となり姉妹市委員会を支援できたらと、前記の運営規定に盛り込み皆さんの了解を得た。

<注釈: 会費収入の少ない時には、立川クラブメンバーが中心となりチャリティー・コンサート(岸洋子・菅原洋一等)を開催し、事業資金を捻出したことがしばしばあったと聞く。一方で、別途積立金(定期預金)として、故猿渡榮一氏と故中村富男氏からの遺贈分として13,600,000が寄せられた。尚、こぶしクラブ設立後、2011年3月末現在、別途積立金は他の人からの遺贈・寄贈分が加わり、19,600,000円となっている>

3. 姉妹市委員会の変節

基本的にこの委員会は、目的に賛同する個人が会員となり、その中から、役員・理事が総会の決議で選ばれてきた。会員は年会費1000円以上納めることで「普通会員」となる。その他に、年会費一万円の「特別会員」、団体加入の「賛助会員」、「名誉会員」がある。

平成7年(1995年)立川市姉妹市委員会は「立川・サンバーナディノ姉妹市委員会」に名称が改定された。この一見何でもない改称こそ、委員会の本質を変えるものであった。この改称は立川市からの要請である。この背景には、立川市の方針があった。当時、経費節減のため民間委託できるものは民間にという方針が基本にあり、この立川市姉妹市委員会もその例外ではなかった。それまでは、委員会の開催、学生の受入・派遣のスケジュール作成、里親探し等の運営実務のほとんどを市役所総務部の課長・係長が担当した。役員・理事は会議に出席し、提出された議案を審議、決定し年間行事に参加することが主な役割であった。この大変な時期に、現猿渡委員長は1996年4月より委員長に就任する。それを最大に補佐し支え続けたのが委員長と同級生の故小沢龍之助事務局長である。

<注釈: 来日・派遣学生の送迎や委員会主催のバス小旅行に使用された立川市所有のバス(運転手つき)もこの時から使用できなくなった。市役所総務の学生の募集事務(交換学生は「両市の小さな親善大使」と位置付けている)を除き、すべて委員会の事務局に移管された>

4. 委員会組織の見直し、実践的・機能的組織への再構築

それまで市役所に、ある意味では「おんぶにだっこ」であった委員会の運営を、委員会

そのものが現実に行わなくてはならなくなった。市役所に事務局(の机)を置くことの許可はあったが、実際は小沢宅を事務局とし、市役所職員が行っていたことはほとんど小沢先生が引き受けてくれた。

委員会組織の見直しと、実践的機能的組織の再構築のための会議を何度も新藤ルームで持った。支援団体の意見を反映するために「職権理事」制度の導入。部会の充実。姉妹市親の会の充実(里親の会の廃止)。青年クラブの再編、等々である。

2006年秋、小沢先生が体調不良により事務長を辞任するまで、陰に陽に事務局長の職責を果たしていただいた。新たな学生の選考試験の基礎を作ったと共に、応募学生が年々減少し、里親を引き受けてくれる市民もなくなり、派遣学生宅を里親の家庭にお願いすることになった過程で忘れることができないのは、書類・筆記試験に合格した学生宅に必ず内密の調査に赴いたこと、合格した学生、派遣後の学生の面倒を良く見たことである。

この学生交換事業は、単に学生を親善交流のため交換することだけではない。未来を託す青少年を育てること、つまり青少年育成事業の一環である。青年クラブ充実の中には、既存の青年クラブの充実もさることながら、派遣学生に選ばれ、大学を卒業するまで姉妹市委員会のスタッフとして委員会内「青年クラブ幹事団」として育成することも含まれる。さすがに教育会出身の小沢先生は、このことを十分意識して学生に接しておられた。

支援協力6団体=東京立川ロータリー・クラブ、東京立川こぶしロータリー・クラブ、東京ライオンズクラブ、立川青年会議所、国際ソロプチミスト、姉妹市親の会=がある。ここから、資金面の支援と運営面の協力をいただいている。運営面での協力の中には、6団体が交代で主催する「来日学生の小旅行」「職権理事の派遣」「帰国報告会の開催」「青年クラブOBの卓話への招聘」がある。残念なことに近年は、この意味で「団体としての意識」を持って協力いただいているのは東京立川ロータリー・クラブと姉妹市親の会だけである。二つの団体を除き、上記4団体の会員、青年クラブOBが個人の資格で姉妹市委員会の運営に参加しているのが現状である。この意味でも今後いろいろな問題が生じてくるものと予測する。

5. 委員会への期待

小沢事務局長引退後、負担を分散することを考え、役割分担を明確にし新たな委員会構成を再構築した。総務部、派遣事業部、受入事業部、広報部、会員増強部、青年クラブ幹事団。しかし、残念ながら、2007年には山岸派遣事業部長が、2008年には尾崎総務部長が他界された。そして今年、永井委員長も鬼籍の人となった。

将来は、支援6団体からの特別会員が理事会を構成し、実務上は、姉妹市親の会と青年クラブが中心となり、委員会を実質的に運営することが理想であろう。市役所が実務を引いた今、姉妹市親の会と青年クラブに期待すること大である。